

莫大であろう。私が日本人世話会で受けた証明は十九万八千円、現在に換算すると五億円近くになるだろう。

昭和二十一年五月、石けん工場長としてモスクワ行きの話がもちあがった。恐ろしくなって急遽脱出を計画、百七十八人を集めて一人八百円で船を買収し南鮮の注文津に上陸、アメリカ舟艇に乗り換え、更に釜山から日本船景福丸で博多港に上陸した。

一人千円の政府手当てで生活はできない。ヤミ商売をしながら辛うじて生活を維持し、引き揚げ者住宅建築にも努力し国家補助を得て成功した。昭和二十五年米子市で鳥取県産業観光大博覧会が開かれるに当たり同事務局次長に推され、成功裡に終わって地元の日新聞社取締役営業局長、次に協同組合丸合理事長、KK主婦の店社長、この十年間に勉強して現在の心理学院学院長になり二十二年めに入る。今、本職のほかに米子市老人クラブ連合会長、鳥取県老人クラブ連合会副会長、米子市シルバー人材センター理事として高齢者社会に奉仕し、米子市その他の当て職が十二ある。

終戦から引き揚げのことは客観的に見つめることができ、全く変わった道を歩いてきたが、書けば一冊の本になるだろう。

大陸への憧れと

戦後までの生活記録概要

宮城県 千葉 慶吉

昭和十一年、私は知人に勧められかねてから大陸に憧れていたので希望に燃え、朝鮮咸鏡南道西湖津という港にある会社に就職のため渡鮮した。就職中に朝鮮ソ満国境付近で武力衝突が起こった。張鼓峰事件である。

内地日本から多くの将兵が貨物列車で輸送されて来るのを西湖津駅で見送った。隣の興南邑には朝鮮窒素株式会社の大工場があり、街は危機感が高まり、直ちに対空防衛の民間人を含む飛行機監視隊が組織編成された。私も隊員の一人として参加し港外の突端に位置する西湖津燈台で日夜飛行機の監視に当たったが、幸いに現地にお

いて停戦交渉が成立し事件が終結したことを記憶している。

私が監視中の余暇に燈台の業務について燈台長（高橋睦太郎さん、千葉県出身）から種々燈台の内容を聞かされたとき、一般の人たちが思っている認識は燈台勤務は単なる燈台守りとして世に言う世捨て人の職業のように誤解蔑視されている感じもあった。が、どうしてどうして、まさに国際的な仕事で、万国共通の海図誌を見て世界各国の船舶が安全に航海できるのは夜間は燈台の燈火、昼間はあの白亜の塔を目標に安全なる航海をしていることや、これから近代設備として無線電信による電波標識や気象通報、その他色々な業務を行っていることを聞かされ、私の認識不足と無知を露呈した。

そこで私は燈台職員になることを決意した。所管は朝鮮総督府通信局で、受験資格は旧中卒または四年終了か同等以上の学歴を有する者であり、早速一夜漬けとにわか勉強で受験に挑戦、末席を汚し合格の通知を受け総督府通信吏員養成所（朝鮮京城府）へ行った。全鮮と内地は、北は北海道から南は九州方面まで応募された二十七

人が入所、航路標識課程の専門教育を受け、卒業と同時にそれぞれの任地へ赴任し、私は全羅南道珍島郡孟骨島里竹島燈台（無線羅針・標識局併置）に赴任した。

職員は七、八人、現地採用の雑務手二人、それに妻帯者もおりにぎやかであった。大東亜戦争の開戦と同時に我々の任務も重かつ大で多忙を極めたが、昭和十九年九月突然私に転勤命令の電報がきた。転出先は全羅北道沃溝郡末島里末島燈台。この燈台は小規模で無線設備が設置され開局したばかりで、連絡通信が主業務であった。

昭和二十年に入るや戦局は不利な情報ばかり、そのうちに京城の本局から家族の疎開命令がきたが、私はもとより大陸に骨を埋めるつもりで渡鮮したから、家内にも言い含め、二歳になる長女とともにいざという時には死する覚悟であったから、疎開勧告には応じなかった。戦局も本土に迫り、黄海洋上においては満洲方面からの輸送船団は敵機に襲撃され、幾隻かの船が乗組員とともに黄海の海底の藻屑と沈んでいった。何事も知らない家族はどのような思いだろうと考えるとき、いかに戦争とい

うものは残酷なものかを目前に見て悲しく考えさせられた。ひたすら陸の上から、海底深く消えていった戦士たちの冥福を祈るのみ、合掌。

洋上で交戦の都度、今度は国際法を無視して燈台に向かって機銃掃射を浴びせられ、家内と子供は近くの松林に避難させたが、松林の枝がバリバリと音をたてるごとに、いつ銃弾に倒れるか本当に生きた心地がしない。本当に恐怖の明け暮れで、子供は飛行機の爆音がすると、「こわいよう。」と泣き叫ぶありさまは実にかわいそうであった。こうしたなかで燈火を守り電鍵をたたき続け死守した。

昭和二十年八月十五日、あの陛下の放送を聴取し、勝利を信じてがんばってきたが、無条件降伏にはすっかり失望と思案にくれていたところ、整理して引き揚げるよう連絡を受けたので一応整理し雑務手に任せ待機した。通信連絡が途絶しているので情況を見に小舟を雇い郡山港に出た。郡山駅に行つたところ乗車を待つ人で大混雑。それに切符を購入するには朝鮮語と英語が優先の会話なので仕方なく島に戻つた。満州方面から内地に向かう通

過船舶を待つことにし、毎日洋上を眺めていたら海岸沿いに二隻の機帆船を見つけ、夢中で手旗信号で乗船を依頼した。本籍地はどこなりやと応答を求めてきたから自分の本籍地を返信すると、間もなく寄港するから直ちに乗船準備せよと返答があった。喜んで宿舍に戻り他の家族とも相談し、取り急ぎ着替えのものと若干の食糧を持って乗船した。

私の大陸への夢は消え去り、無念な思いで仲良く生活した島民と最後の職場に別れを告げ、海路を内地へと航行、途中、対馬竹敷港に寄港し船舶に装備してある砲銃等を防備隊に引き渡した。どうも玄界灘には今なお連合軍の潜水艦が警戒しており、拿捕される危険が伴うとの情報、仕方なく数か月滞在避難する。食糧も欠乏しつつあるので船長の判断で夜陰に乗じて玄界灘を直航、翌朝無事九州の山が見えたとたん、職場で死を決意したこともあったが家族と日本の土を踏むことができたことをみんな喜び合った。

戸畑港で引き揚げの手続きをし、駅で乗車券を買い一日待つて乗つた汽車も超満員、機関車の後の石炭車に乗

り継ぎながら二日間も要し、郷里宮城県牡鹿郡女川町の生家に着いた。夜中、顔も体も真っ黒で乞食姿で生家の玄関を開けて立つと、多くの人が集まっていた、中から幽霊ではないかと言う声も聞こえた。無理もない姿の親子三人、そのうち奥の方から父親が見え、「死んだと思っていた。良く生きて帰って来た。」と喜んでくれた。今晚の集まりは母親が死亡して明日は四十九日の忌日に当たるというので、仏壇の前で三人で合掌する。

内地の食糧事情を聞かされ、明日からの食糧確保が心配になり眠れない。取りあえず家内の家の納屋の一隅を借りて落ち着き、部落の人たちがやっている製塩の仕事に取りかかった。自分は山から風倒木を拾い集め木桶で運び、家内は海水を汲んできては毎日塩煮、塩がたまれば石油缶に詰め、背負って六キロ以上もある駅から列車に乗り、隣県まで行って米と物交する。途中取り締まり警官の目を逃れるため夜遅く帰り、銀飯にありつけるのが何よりの明日への活力で越冬した。

何分無一文であるから、今度は春から秋まで実姉宅の小型船に乗り組み漁船員となる。給料はよいが舵の疲労

がはなはだしい。闇商売で結構生活に困らないでいる人が居るようだが、自分には性が合わないから前歴を生かし公務員になるため各官庁を歩き回った。その時に元上司であった朝鮮総督府交通局海事課長であった西田豊彦さんにお会いできた。お陰で塩釜市にある東北海運局に推薦していただき、暮れの十二月東北海運局より直ちに出局せよとの電報があり、早速出局し手続きを済ませ何よりのボーナスを持って帰宅しドブクロで乾杯。

さて、就職はかなったが今度は住宅の問題で一難去ってまた一難、引き揚げ者に貸す住宅があると聞き塩釜市役所にお願したところ越冬住宅を貸借され、家族を呼び寄せた。旧陸軍の馬小屋を改造した建物一棟を二十七世帯に区割りした八畳一間だけ、隣家の間仕切りは節穴だらけの板一枚張り、窓はセロハン張り、畳はなく魚臭いむしろを購入して敷き詰め畳代わりにした。食卓は林檎箱二個。石の上にも三年という諺があるがここはむしろの上に三年。運輸技官兼運輸事務官として出勤、海上保安庁発足と同時に出向し海上保安官役付きとなり、宿舎も貸与された。

各部管理職を経て通算三十八年余の公務員生活を第一管区海上保安本部を最後に停年退職させていただきました。

私の引揚日記

兵庫県 塩谷 隆徳

終戦後既に四十五年を迎えんとする今日、あの悲惨極まりない過去を回顧したくはないが、後世の記録として残し、戦争がいかに悲惨であり、人類の不幸であったことを記し、後世への戒めともなれば幸甚と考える。この手記は、私個人の極めて端的のものであるために、当時の引揚者何十万人の苦勞の真実の万分の一も表現できないが、国土に最も近い植民地であった南朝鮮でさえ、以下のような実情であったので、遠き外地におられた方々の引揚の苦難は、今日では想像も及ばないものがあつたことは事実であるが、今日の繁栄を見ずして、外地で他界した大勢の方々もあつたことだ。

私は朝鮮警察官として、約二十年間、全羅北道内に勤務したもので、終戦後の治安状況を前編に、また南朝鮮の引揚状況を後編として、拙文を省みず綴ってみよう。

終戦から引揚までの管内の状況

終戦の詔勅に号泣す

昭和二十年八月十五日早朝、総督府より長文の極秘暗号電信が入った。解読したその内容は、私どもには晴天霹靂の悲報であった。(当時同地警察本部幹部)「正午を期し日本軍は米軍に無条件降伏することを、天皇陛下がラジオ放送される」と。

直ちに本部幹部級を総召集し、これに対する処置について鳩首会議を開いたが、未だかつて我々の体験したことのない敗戦、しかも植民地でのこと、適切な方針も樹たぬまま、不安と焦慮のみ。その間に管内各署に極秘通達したことはもちろん。いよいよ正午、ラジオのスイッチを入れ、一同緊張の面持で、流れ出る陛下の下音も悲壮に聞こえる。「日本軍は米軍に無条件降伏する。この責任は朕が責任である」とのお言葉に一同は崩れるように号泣した。今まで勝つために、勝つためにと張り切つて